

【フォーラム】

マラヤ大学の大学世界ランキングを支える教員たちの貢献と疲弊

木村かおり

2023年6月マラヤ大学 (University of Malaya) は、イギリスの大学評価機関であるクアクアレリ・シモンズ (Quacquarelli Symonds: QS) が発表した大学世界ランキング2024 (QS World University Rankings 2024) で世界ランキング65位となり、6年連続マレーシアのトップ大学に輝いたと報道された。そのランキングに貢献する1つが「国際性」の項目である。これには、在籍外国人教員の割合が含まれる。実はマラヤ大学は、減ってしまった外国人教員数を回復するために、2019年に国外の研究者に声をかけ相当数をリクルートした。リクルートされた教員たちはコロナ感染症の流行が落ち着いた2021年から順次マレーシアに入国した。2022年6月、この1、2年にマラヤ大学に着任した教員たちのためにオリエンテーションが行われた。人文社会科学部 (Faculty of Arts And Social Sciences) では、この時の新任の半数が外国人で、その中の1人が筆者である。

私はこれ以前にもマラヤ大学言語学部 (Faculty of Languages and Linguistics) に所属していた。今回は人文社会科学部から声がかかり、ありがたくも再赴任することになった。ただ、コロナ禍で国境が封鎖されていたため、私が赴任できたのも2021年に入ってからだった。再赴任したときに同僚が私に溜息交じりで伝えたのは、「今マラヤ大学はランキング至上主義で、教員は数字だけで評価されている」という点であった。本稿では、この教員たちのため息の原因と国際化をめざすマラヤ大学について私論を述べたい。

マラヤ大学は、マレーシアのトップ大学であるし、世界ランキングの順位を上げようとすることに問題はないだろう。しかし、マラヤ大学の現場にいと、大学はランキング至上主義になるあまり、数字だけを見て、質を問うことを忘れていていると感じる。

QS大学世界ランキングの評価項目にある「国際性」では、「留学生の割合」も指標となっている。留学生の割合も国際性を示す1つの指標であるということには異論はない。例えば、日本でも2008年に「留学生30万人計画」が策定された。本計画には、海外から優秀な留学生を誘致し、日本の大学で学ばせ、日本企業への就職を支援し、日本の経済と社会を支える人材として育成するという目的があり、また日本の大学の国際化を推進するという目的がある。確かに、留学生が増えることは、キャンパスの国際化につながるだろう。マレーシアでも、留学生の獲得は、国際化を示す指標の1つだと考えられている。

高等教育省 (MOHE) は、マレーシア高等教育における国際化政策 (Internationalisation Policy for Higher Education Malaysia) として、2020年までに20万人の留学生の受け入れるという目標を2011年に掲げた。さらに、教育開発計画2015-2025 (Malaysia Education Development Plan 2015-2025) では、2025年までに25万人の留学生を受け入れることを目標に掲げた。コロナ禍で留学生数は一時減少に転じ、25万人という目標達成にはまだ

遠いが、マレーシアの受け入れ留学生数は、2000年前半から増加の傾向にあり、2023年現在、マラヤ大学の留学生数も再び増加している。

留学生の獲得がキャンパスの国際化につながると考えれば、マレーシアの大学における国際化は、日本では考えられないスピード感を持って行われている。国立大学であるマラヤ大学の2023年度の統計を見てみると、学生総数3万5,054人に対し留学生数は8,446人で、その割合は24.1%である。学部生の14.0%、大学院生の37.8%が留学生である(表1)。国立大学で留学生数が第2位のマレーシア工科大学の留学生数は4,987人で、全学生の16.7%(2023年)であるので、国立大学ではマラヤ大学に留学生が最も集まっていると言える。

数字を実感しやすいように、日本の大学と比較してみよう。内閣官房教育未来創造会議ワーキンググループによる2022年の調査報告によれば、日本の大学の在學生に占める留学生の平均割合は5.9%であり、マラヤ大学の24.1%はかなり高いと言えよう。また日本で留学生数トップの早稲田大学と東京大学の在學生に占める留学生の割合を見てみると、早稲田大学では学部生の5.7%、大学院生の37.5%、東京大学では学部生の2.1%、大学院生の27.0%が留学生である。このことから、数字の上では、マラヤ大学のキャンパスの国際化はかなり進んでいると言える。

表1 マラヤ大学の在學生数(2023年6月時点)

	国内生		留学生		合計
	人数	割合	人数	割合	
学部生	17,347人	86.0%	2,834人	14.0%	20,181人
大学院生	9,261人	62.2%	5,612人	37.8%	14,873人
合計	26,608人	75.9%	8,466人	24.1%	35,054人

(出所) マラヤ大学のサイト <https://www.um.edu.my/um-fact-sheet> から筆者作成

この数字は2020年までに高所得国入りすることをめざしたビジョン2020(WAWASAN2020)、2030年までに所得グループ、民族、宗教、サプライチェーンにおける公正かつ公平な分配によるいわゆる先進国としての持続可能な成長を達成することを目的としたシェアード・プロスペリティ・ビジョン2030(SPV2030)といった政府が押し進めてきた政策の結果生まれたものだろう。

だが、大学には教育省から獲得留学生数のみならず、様々な数字の形で目標が与えられた。そして、スピード達成を要求されたため、「数字の達成」が目標となった。そのため教員たちは、数字を作り出すことに執着し、疲弊しているように見える。では、どのような数字が求められているのか。

たとえば、マレーシアには、日本の文部科学省が掲げている「生きる力、学びのその先へ」というような教育者の想像力を駆り立てるような、それでいてあいまいな教育目標はない。あるのは、数字による明確な目標である。教育省は、教育青書の計画概要(Executive Summary Blueprint)で「国際基準の高品質の教育へアクセスできるように国が取り組んでいくこと」を強調し、2017年に「高等教育戦略計画2018-2022(JPT Strategic Plan 2018-

2022)」を発表した。この中で、教育の国際化 (Collaboration for Global excellence) という目標で挙げられている指標には、①留学生獲得数 (以下、インバウンド数)、②マレーシア人の留学プログラム参加比率 (以下、アウトバウンド参加比率)、③QS 大学世界ランキングトップ 100 入り大学数 (以下、QS 大学 Top100)、④科目別 QS 大学世界ランキングトップ 50 入り大学数 (以下、科目別 QS 大学 Top50) という 4 つのカテゴリーがある。この指標こそが高等教育戦略プラン 2018-2022 における主要業績評価指標 (Key Performance Indicator: KPI) である。

上記の 4 つの指標カテゴリーは、教育省から大学、さらに学部以降りてきたときには、32 の項目に分類される。32 項目のうち 24 項目が③と④に関する項目である。①と②に関する項目は、8 項目である。

これらの指標の細目が大学、学部から教員個人においてきたとき、教員個人の査定項目 KPI として機能する。KPI は細かく点数化され、その点数が給料、昇給、契約の更新に直結する。そのため教員は大学の「数字」の目標達成に躍起にならざるを得ない。③と④を実現するためとして、以下のような細目目標が設定されている。教員個人でいくつ国際連携や産業界との連携を持っているか、インデックス別でのジャーナル投稿本数、引用数が何本であるか、学外および企業からの研究費および寄付金の獲得金額はいくらか、博士課程の指導学生数、発明、パテントはいくつか、などなどである。これらが点数化され、教員の評価となるため、教員は細目目標の達成に躍起になる。

③と④の対応に時間を割かれた教員たちは、①と②に該当するインバウンド学生のプログラムの内容の充実やアウトバウンド参加比率を上げることへの関心が低くなってしまふのは当然だろう。人文社会科学部の例を挙げると、中国研究所 (Institute of China Studies) を通じて中国や台湾と実施するものを除き、学部で組み立てたアウトバウンドプログラムはない。また、送り出し先の大学との共同プログラム構築やオンライン国際協働学習 (Collaborative Online International Learning) のプログラムを国外の大学に提案していこうという動きは学部にはない。だからといって、大学の国際部の職員が活発にプログラム構築を考えているわけでもない。留学生および国際交流課 (Global Enrichment & Mobility division) は、学生に対して、現地で奨学金が受給できる留学や交換留学のスロットの提示を行うが、学生を送り出すためのプログラムの構築や、送り出し先の大学との共同プログラムを構築している様子はない。必要なのは、教育内容を共に構築する共同プログラムの数ではなく、送り出す人数を増加させることだからであろう。

インバウンドに関しても同様のことが言える。在学留学生数が増加しているのであるから、キャンパスの国際化が進行していると述べたいが、これも数字だけで内実が追いついていない。私は、留学生数の増加につれて、様々な国の留学生と国内学生が授業を離れて、自国の文化を紹介し合い、意見を交換し合っているといった光景がマラヤ大学のキャンパス内に広がっていくことがキャンパスの国際化だと考える。

ところが、キャンパスで様々な国の留学生と国内学生が活発に交流している姿はほとんど見かけない。マラヤ大学内でインバウンドとアウトバウンドを担当している留学生およ

び国際交流課が実施した交流イベントをサイトにあげているが、2018年から2022年までに「食と文化の国際イベント」という記録が1度あるだけである。日本の様々な大学の留学センター等のホームページに、イベントの予告や報告が次々とあがってくるのとかかなり様子が違う。もちろん、マラヤ大学も交換留学や短期インバウンドプログラムで来る留学生に対して歓送迎会を実施している。しかし、歓送迎会として実施するイベントは、ダイバーシティ構築、キャンパスのグローバル化、国際化を目指して実施しようとするイベントとは考えにくい。というのは、そのようなイベントは、様々な国の学生と協働しながら構築しようとするイベントというより、ホストとして準備しているイベントだと考えられるからである。そもそも、マラヤ大学には、様々な国から短期留学で学生が来ているのに、特定の国の学生を対象としたイベントしか存在していないように見える。その特定の国とは日本である。

実はマラヤ大学には、正規留学生としての日本人学生は多くないが、短期インバウンドではまとまった数の日本人学生が参加している。留学生および国際交流課の報告(2017～2021年)によれば、インドネシア、韓国、タイ、中国、日本、フィリピンからの留学生が留学生数の上位5位を占めている。しかし、このように複数の国から学生が定期的に留学しており、日本からの留学生数がトップを飾っているわけではないのに、日本以外の国とのイベントがほとんど見ないのである。

留学生数の増加が多様な国の学生とのダイバーシティ構築、キャンパスのグローバル化、国際化を意識した教育プログラム作りにつながっていないのはなぜか。様々な国の留学生との多様な学びを目指したイベントを実施するよりも、確実に留学生が来る特定の短期プログラムのイベントを実施するほうが教員のKPIの点数をあげるからである。大学は留学生数でしかキャンパスの国際化の度合いが示せないと考えているように思われる。

ここで私が懸念しているのは、マラヤ大学の学生が多様な国の学生と活発に交流していないという点ではない。マラヤ大学は、国際化を目指し、留学生を増やそうとしているはずなのに、大学も教員もグローバル人材を育成する国内生の教育を考えた国際共修のプログラム作りを行おうとしていない点である。おしゃべりするだけの国際交流では、国際共修としての教育の質が担保されない。おしゃべりだけなら学生たちは個人でも、寮の中でも行える。だが、ただのおしゃべりで終われば、「文化背景が異なれば、価値観が異なる」という意味や、「同じ言葉でも両者が持っている意味が違う」ということになかなか気づかない。そこにある何かしらの「ずれ」を見出しても、その「ずれ」の意味を考える時間が用意されていないからである。国際共修としての教育の質を担保するためには、学生が見えない「異なり」に気づき、両者の間にある「ずれ」の意味を考え、学び合えるような「意味のある国際交流」が必要である。そのためには、教師たちの教育的な仕掛け作りという教育的サポートが必要なのである。恒常的な教師の教育的サポートやプログラムがあって初めて国際共修という教育の質が担保されるのだ。だが、これまでインバウンドとアウトバウンドの数字を作り出すことにしか意識が向けられていない。

確かに、QS大学ランキングが上げれば、マラヤ大学は国外の学生に注目され、留学生

を獲得することができ、国際性を示す数字の目標を達成できる。だからまずランキングを上げようとするのであろう。だがそもそも大学ランキングとは、大学の教育、研究、国際性の質を示すものだったはずだ。おりしも、マレーシアの英語新聞『スター』が、2023年11月にQS大学世界ランキングのアジア版でマラヤ大学が上位にランクインしていることを取り上げた。だがFree Malaysia Todayのコラムニストは、上位にランクインしながらも、ランキングの順位を前年度から下げたことは、ランキングありきの態度を続けた結果だと指摘し、研究や教育の質を上げることがめざせば、ランキングは後からついてくるはずだと批判した。

これに加え、私は、教員に数字だけを追わせるのではなく、研究や教育の質を上げることが志向させることが教員の無駄な疲労を取り除けると主張したい。そして、活力みなぎる教員たちが新しい研究や国際共修を含めたユニークな教育実践を行い、キャンパスの国際化を推し進めてこそ、マラヤ大学はランキングを上げていけるのだと声を大にして言いたい。

(きむら・かおり マラヤ大学)